

## 4000万人の頭痛 149

## 千夜一夜の頭痛物語

やっぱり怖い、片頭痛持ちの更年期女性に多い、見落としがちなRCVS！

文 清水俊彦

text by Toshiko Shimizu



以前にも、脳血管の至る所が明らか原因なく攣縮し、あたかも雷に打たれたような突然の激しい頭痛で発症する可逆性脳血管攣縮症候群（Reversible cerebral vasoconstriction syndrome [RCVS]）についてお話いたしました。しかしながら、この頭痛は見落とされがちで、適切な治療を怠つても生命予後に重大な支障を来たことは少ないものの、進行性に悪化する疾患であることに間違いありません。明らかな原因は不明とされていますが、臨床的に経験するのは、片頭痛持ちの更年期女性が圧倒的に多く、何らかの女性ホルモン様の作用をするイソフラボンを含有するサプリ服用症例が見られます。その他、大豆系の食材を習慣的に摂取するような食生活を送っている、もしくは脳血管に少なからず影響を与えるチラミン含有のダイエツトサプリ、さらに血液の凝固系に影響を及ぼすものの、シミ取り目的で処方される機会の多いトラネキサム酸を連日服用しているような症例も多々見られます。

この頭痛の特徴は片側に突然起こり、頭痛は時間とともに軽減するものの、入浴や飲酒などの脳血管の急激な拡張因子が加わるたびに繰り返し襲ってくるのが特徴的です。従来は雷鳴頭痛（Thunderclap headache）と呼ばれ、クモ膜下出

血など、生命予後に支障を来す可能性がある器質的な頭痛との鑑別が重要視されてきました。脳血管を非侵襲的に観察することのできるMRIによるMRA検査の普及により、かなりの頻度でこのRCVSを頭痛の原因として特定することが可能となったのです。しかし、発症から数日経過し、ある程度、病変が進行した状態でのMRA検査では診断が比較的容易なことが多いのですが、ごく初期の段階では、頭痛の性質および生活習慣や病歴の詳細な聴取から、この疾患を疑つてからならないと見落とされるケースも多々あります。

この50代の女性は、本人も自覚しない程度の軽い片頭痛持ちであり、シミ取り目的でトラネキサム酸を連日服用していたようです。血管拡張因子であるチラミンを含む赤ワインを飲酒中、突然の右側頭部痛に見舞われ2日後に大学病院の頭痛外来を受診し、MRA検査を施行したものの、全く異状なく心配ないと言われ帰宅しました。しかし一向に頭痛が治まらず、当科を紹介受診されました。頭痛の症状からRCVSを疑い、お持ちいただいた大学病院のMRAで右中大脳動脈の分岐部にすでに発症しかけていると思われる病変を確認し、発症から10日経過していたのですが、再度MRA検査を施行しました。その結果、脳血管の至る所に脳血管攣縮の進行性病変を確認し、即座に治療開始。現在は所見および症状も軽快に

向かっておられます。

このケースも治療が遅れると最悪、脳梗塞やクモ膜下出血を併発していた可能性も否定できません。画像診断の進化した現代医療においても、詳細な病歴の問診を行うことを忘れてはならず、その上で詳細に画像所見を分析することが何よりも重要なことです。

## Profile

日本脳神経外科学会認定医、日本頭痛学会監事を歴任。日本頭痛学会認定専門医。東京女子医科大学病院脳神経センター頭痛外来客員教授、学校法人東京女子医科大学 評議員、獨協医科大学神経内科学講座臨床准教授、一般社団法人グループケアパートナー理事。

ほかに、汐留シティセンターセントラルクリニック、阿見第一クリニック、小山すぎの木クリニック、伊豆大島医療センターの頭痛外来を担当。

昭和61年3月日本医科大学卒業。学会活動をはじめ、NHK「きょうの健康」「クローズアップ現代」など、テレビ出演も多い。『頭痛女子のトリセツ』（マガジンハウス）をはじめ、頭痛関連の著書多数。2024年6月号より、全日空機内誌『翼の王国 TUBASA』に『雲の上の診察室』連載中。



新刊『ウルトラ図解 おとなと子どもの頭痛』  
監修/清水俊彦  
法研（本体1600円+税）  
2月18日（火）発売

